

IV-51 島義勇の「八郎潟開発計画」の背景についての一考察

日本大学工学部 大学院 学生員 ○小林 智仁
日本大学工学部 正会員 藤田 龍之
日本大学工学部 正会員 知野 泰明

1. はじめに

初代秋田県権令・島義勇は「八郎潟開発計画」を計画した。島がこの計画を立てる背景の一つとなったと考えられる資料の一つに「奥州并函館・松前行日記」がある。この資料を佐賀県立図書館の好意により入手し、これについて考察した。

島義勇は文政5年(1822)9月12日、佐賀城下精小路(現在佐賀市与賀町)に生まれ、佐賀藩校弘道館で国学を学んだ。島家は代々学者を多く出し「文の島一族」といわれ、知行300石であった。29歳のとき、「楠公」(南北朝時代における楠木正成・正行父子)崇拝にもとづく尊王主義者大隈重信、江藤新平、副島種臣ら同志十数名と「義祭同盟」をむすぶが、藩主鍋島直正の佐幕的な傾向によって、藩権力と結びつくことはなかった。安政3年(1856)9月、佐賀藩主鍋島直正の命で幕府使節の従者として蝦夷(北海道・樺太)の探検に向かい「人北記」等を記した。安政5年(1822)1月に帰藩した。慶応4年(1868)2月、奥羽征討に際しては、軍艦奉行となった。明治2年(1869)7月、蝦夷開拓使が創設され、鍋島直正が開拓使長官、島義勇は首席判官に任命された。病気のため鍋島直正は現地に赴かず、島が縦横に手腕を振った。鍋島直正辞任後、次官の東久世道禧が長官に昇進したが島はこれを無視して、思いのまま独断専行し在任4ヶ月にして罷免されたが首席判官在任中の功績は高く買われた。明治3年(1870)大学小監となり、明治4年7月侍従、同年12月秋田県権令となった。明治5年6月八郎潟開発計画で井上馨大蔵大輔と衝突して退官した。その後、明治7年江藤新平らと佐賀の乱を起こしたが敗れて処刑された。¹⁾

2. 島義勇の「八郎潟開発計画」

島は明治5年(1872)4月に着任し、秋田県の振興政策として「八郎潟開発計画」を発表した。6月単身上京し、大蔵卿大久保利通に建白書を提出した。島は建白書の中で築港を強調し、八郎潟掘削費15万円、小蒸気船2隻代8千円、外人技術者雇用費用2千円、計16万円をかけて港を造り、その副産物として数千町歩の水田もでき、数年たたずに米の増産を可能にするというものであったが、実現されなかった。

3. 「奥州并函館・松前行日記」について

「奥州并函館・松前行日記」は、昭和56年(1981)、佐賀県多久市大塚家の屋敷内に住む元多久市立図書館司書・細川章氏所蔵の記録・文書類整理中に偶然見つかった。大塚家は佐賀藩の重臣多久家に仕えた石高10石ほどの家臣であった。嘉永6年(1853)アメリカ使節のペリーが浦賀に、ロシア使節のブチャーチンが長崎に来航した。石炭・白蠟・小麦・陶器などを外国に輸出して商人の間で「経済大名」と呼ばれた佐賀藩主・鍋島直正は蝦夷地に南下するロシアに注目した。安政元年(1854)日米・日英・日露和親条約が結ばれ、安政3年(1856)アメリカ総領事ハリスが下田に着任し、幕府にさらなる通商条約を結ぶことを求めた。この時期、鍋島直正は幕府の樺太境界調査の従者として家臣・島義勇を同行させ北方調査を行わせた。佐賀立出から江戸帰着まで島義勇が書いた日記について表-1に示す。「奥州并函館・松前行日記」は奥州三ノ戸から函館、松前、江差までの行程で書かれたものである。「奥州并函館・松前行日記」の中の五ノ戸から七ノ戸の行程を抜粋して一部注釈をつけたものを表-2に示した。五ノ戸から七ノ戸の行程はこの時代1日の行程であったが表-2より島は相坂川近くの江渡七兵衛宅に安政4年2月16日から19日まで3泊し、19日の日記で島は江渡七兵衛より相坂川近くの開拓について聞き、見学しながら七ノ戸に向かったことがわかる。この時、相坂川近くでは新渡戸傳らが安政2年(1855)から安政6年(1859)まで三本木原開拓のための人工河川工事に着手していた。新渡戸傳が記した「三本木平開業之記」の中の加入者面附表に江渡七兵衛の名がある。新渡戸傳が記した日誌の中の江渡七兵衛に関する記

載の一部を抜粋したものを表－3に示した。加入者面附表にある江渡七兵衛の名と表－3より江渡七兵衛が三本木原開拓の有力な支持者の一人であったことがわかる。

表－1 島義勇日記表²⁾

日程	行程	日記名
安政3年9月4日～安政4年12月7日	佐賀出立から江戸出立まで	「島義勇旅日記」
安政3年12月7日～安政4年2月13日	江戸出立から奥羽州三ノ戸まで	「奥州行日記」
安政4年2月14日～同年5月10日	三ノ戸から函館、松前、江差滞在まで	「奥州並函館松前行日記」
不明	不明	「入北記・雲」
安政4年7月1日～同年8月4日	北蝦夷トンナイより蝦夷地サハキまで	「入北記・行」
安政4年8月5日～同年8月28日	蝦夷地サハキからピロウまで	「入北記・雨」
安政4年8月29日～同年9月27日	ピロウから函館まで	「入北記・施」
安政4年9月～同年12月	海路で函館から江戸に帰着するまで	「函奥日記並東洋記」

表－2 「奥州并函館・松前行日記」の五ノ戸から七ノ戸までの行程表³⁾

日程(安政4年2月)	日記
15日	十五日三里十五丁程二而浅水、一里十七丁二而、五ノ戸、雪にて此に宿す、百八十人計の土着、町家五百軒、
16日	十六日一里半にて、傳法寺(地名)、藤島驛、驛所はつれ、相坂川(奥入瀬川)、船渡しにて急流、向土手少し往来より右に入りて、江渡七兵衛宅に投す、風流ノ武士なり、富家にてよく客を愛す、 七ノ戸にても管弦等ノ風盛に、土氣惰弱、竹光の帯刀多く、博奕家多しと、七兵衛話なり、
17日、18日	十七日十八日滞留、肥後内田素平久滞留之由二而來り接す、喉杯に刀きす有り、不審しき人ならんと思ふ、
19日	十九日発程、江渡より筆帋銭になる、都而手厚き事なり、他日報すへし、三里廿五丁之所、沃野にて少も闕けず、近日中よりひらき方になる筈なり、最前盛岡侯巡見之上、相坂川其外山二千間程切りぬき、河をひき、則かも土民勝手次第に居を移し候様、 野辺地辺迄、東西十二里、南北八里之荒野と云、十萬石之見立にて、金壹萬五千兩計の手附金、吟味メリと云、垂涎五尺、頑藩とハ乍申、祖先之時、所ノ土着を置候形勢杯考ふるに、果豪傑とみへたり、それを今迄頑然として、隣境より時ノ山林杯侵され候事ハ、君臣共不肖そろひしとみゆ、今日道のり凡五里計、雪泥に困る、うるし、當今三百式十目、代金式分計と云、十年前には、武貫文計にて、かい整ひしと、今も民屋にても、柱等うるしかけし所数多あり、多して、直やすきゆへならん、七ノ戸、古城内、榎長庵所に宿す、

表－3 日誌の中の江渡七兵衛に関する記載年代別表⁴⁾

年月日	日誌
安政2年10月6日	傳百石行に付源内右八乙藏留之助召連書相坂村江渡七兵衛宅支度致し七ツ半時百石村秋田屋傳之丞止宿三浦伊八蔭屋喜右工門澤田喜右工門見舞のため來る村肝入並秋田屋傳之丞蔭屋喜右工門右三人御新田被方植立世話方申達候 今日喜代助普請場へ出候 五戸伊勢屋安兵衛二男宇七來り一泊申候
安政3年8月3日	一、江渡七兵衛より出金延に付願合状來る
安政3年8月10日	一、江渡七兵衛より白米ニ駄來る五拾駄の内
安政3年10月3日	一、相坂の江渡七兵衛より書状壹喜代助へ壹通來る
安政3年10月14日	一、江渡七兵衛名代中川原順左工門來り白米ニ駄同處より來る

4. まとめ

島は安政3年(1856)に幕府使節の従者として蝦夷の探検に向かったおり、三本木を通り三本木原開拓を見たと、考えられる。島が三本木付近を通過した時期は渇水期の冬であり、まさに河川工事の最中であつたと推測される。蝦夷地に赴く際に三本木原開拓を見たことが、明治2年蝦夷開拓使主席判官時の札幌建設、明治4年秋田県権令時の「八郎湯開発計画」に影響し、島の洞察力を養ったと考えられる。

参考文献

- 1) 創元社:「佐賀歴史散歩」, 滝口康彦, p182～183, 1873、2) 北海道大学附属図書館ホームページ: 北方資料データベース、3) 佐賀歴史研究会準備会: 佐賀歴史研究会準備会誌・第一号、佐賀歴史研究会準備会, p. 1983、
- 4) 積雪地方農村経済調査会: 三本木原開拓誌、積雪地方農村経済調査会, p 10, p 16, p 46, p 59, p 62, 1945